

粉好きの系譜 第 21 回

正体不明のコムギ

前回、日本列島には、コムギが遅くとも 4，5 世紀には入っていたらしいと書いたが、そのときの小麦が今日本にある小麦のもとになったかどうかまではわかっていない。日本の古代の遺跡からは、小麦はどの時代からもでてくるが、そのすべてがつながっている証拠はない。

それに、小麦が日本に渡来したのがたった 1 回などということがあるだろうか。しかも南北に長い列島に今ある小麦がみな同じ祖先を持つと考える理由もないように思われる。

そんな目でふるい時代の日本の小麦をみたあるひとりの男がいた。北海道大学の先生をしていた吉崎昌一さんである。彼は、北海道小樽市のとある遺跡で見つかった小麦の種子のなかに、異様に小さい種子があるのを見つけた。おおきさが他の種子に比べて半分ほどしかない。そういう種類の小麦なのか、それとも栄養が悪くて育たなかっただけなのかはわからないが、とにかく粒が小さい。吉崎さんはこのごく小粒の小麦にエゾコムギの名前をつけた。

その後、このような小粒の小麦は日本各地の遺跡でみつかったが、その素性は今もってわからない。種をまいて芽がでてくれればいろいろなことがわかるだろうが、遺跡から出たものではそれもかなわない。だから、エゾコムギで作ったうどんやお好み焼きがどんな味になるのか見当もつかないのだ。

エゾコムギはその形で他と区別できたが、それ以外にも未知の小麦があったかもしれない。「小麦の道」は何本もあったことだろう。いく筋もの道の存在。それはいくつもの粉ものの文化がかつての日本列島にあったかもしれないことを示している。